

3. 中学3年

体験を通して考える国際理解

石川久美・三小田博昭
川田基生・横地武*

I. 学年テーマについて

担任として生徒に接していると、学力はあっても協調性や社会性に乏しい生徒、人とのかかわり方が苦手な生徒、目立たない普通の生徒として過ごすために表面的に他の生徒にあわせているだけの生徒、生徒集団における“普通でない生徒”へのいじめ、登校することが困難である生徒など、生徒の抱える問題はさらに深刻化・多様化している面がある。

このような現状の中で、多くの人と接して視野を広げ、客観的に自己を見つめる力を育て、生徒どうしが自分の意見を表現しあえる基礎をつくるのが大切である。自己を客観的に見る力を育て、自分の意見を自信をもって表現し、他の人と意志疎通していく力を育てることが、国際理解の基盤になる。さらにこの力をのばしてゆけば、「人生を自覚的に選択していく力」につなげていくことができる。

中学3年生ということを考慮して、身近な相互理解、身近な国際理解を基盤として1年間で世界へと視野を広げ、自分なりの国際理解・平和の概念をつくることを目指した。

まず、毎日の日常生活の中で、考え方の違いや誤解によって争いが起こっていることはないかを考える。国際化が進む日本において、どのような変化が起こりつつあるのかを考える。かつて、戦争という事態まで発展してしまった国どうしの争いがなぜ、どのように起こり、現在の日本にどのような形で影響しているのか考える。今なお、世界の各地で絶えることなく起きている戦争の原因を探る。自分たちの生活にたち戻って考え、今、自分たちに何ができ、何をすべきかを考える。

II. 学習方法と指導体制について

中学3年生では、例年、修学旅行において班ごとに広島でフィールドワークを行うため、生徒の探求活動も班活動を中心とした。しかし、4月から5月

は学年を4つのグループに分けて話し合いをしたり、6グループに分けて留学生と話をしたりとフィールドワークの班や、内容にこだわらない活動を行い、学年テーマである「体験を通して国際理解を考える」ことの動機付けの期間とした。

6月からは、修学旅行のフィールドワークの準備が始まり、学年で12に分けた班活動の中で、自分たちの取り組むテーマを見つけ、事前学習を行った。また、修学旅行の事後学習も同じ班で行い、研究集録を作成した。

3学期には、班活動によって得た知識をもとに、小論文を作成し、自分なりに考えたことをまとめた。

以上の活動の中で、6月よりインターネットを取り入れ、情報収集や、メールの交換、アンケート調査などに利用した。

総合人間科の授業はすべて、ティームティーチングで行い、4つのグループの場合には担任団4人が各々のグループにつき、各クラスごとの活動の時には、2人ずつ担当した。広島でのフィールドワークの事前指導においては、3つの班に一人の指導教官制をとり、指導教官が班員を呼んで面接してきめ細かな指導を行うなど、内容に応じて柔軟に対応した。

III. 第1年次から第2年次にむけて（成果と課題）

1. 前年度の同学年との比較検討

前年度の中学3年生の指導重点事項は学習面において「学ぶ楽しさの共有」、生活面においては「信頼と安らぎのある気持ちのいい学校生活」であった。学校あげての文部省指定研究への取り組みが生活指導を手薄なものにしてはならないと考え、「共有」「信頼と安らぎ」といった視点を重視した。

学習指導も地味な読書指導、作文指導を中心に（1）道徳教材の工夫、（2）戦争中の暮らしの在り方に着目した平和教育教材の再構成、（3）昭和史の詳細な学習、（4）NHKラジオ講座「基礎英語」によ

*愛知県立知立東高校（1997.4より）

3. 中学3年 体験を通して考える国際理解

る家庭学習との連携、(5) パソコンの学習、ワープロソフト「一太郎」の全員修得、(6) 映画鑑賞、(7) パソコン通信・海外の学校との交流学习の7項目を設定した。これらの諸目標を学年担任団によって多面的包括的に指導する。多方面かつ大量の新教材へ取り組むことは高校受験にわずらわされない中高一貫教育下の本校生徒の学習を豊かなものにする、そのような構想で初年度は出発した。

学習過程の面では1学期を「興味の喚起と新しい認識の探索の時期」とし、2学期を「調査と討論、模索の時期」、3学期を「全体的認識への統合の時期」として展開した。昨年度の実践についてのより詳しい説明は本校紀要を参照されたい。

今年度は研究開発中心の学校の全体的流れの定着を前提として、生活指導重視型の学習指導からより大胆に研究を意識した学習指導への転換をはかった。具体的には次の「継続と発展」が主要な内容となる。中学2年からの指導の内容と方法における継続性を重視した。それとともに昨年度の中学3年のひとつの特色であるインターネットの利用をさらに前進させることとした。このことは、Vの1(3)インターネットで記述する。

2. 前年度からの継続と発展

中学2年生では、「生命と環境」という大きなテーマを、さらに「生命の源—水と食物—」としてより具体的にとらえ、生徒自身が身近な生活体験の中から発見した個人テーマを1年間通して追求した。自分の興味のある、自分で見つけたテーマであり、自分が調べなければ進まないため、ねばり強く追求することができた。さらに、自分のテーマについては学年で一番詳しいという自信をもつことができた生徒は、他の教科やクラス活動などの面でも積極的に取り組む姿勢が見られた。

また、既成教科では、積極的でない生徒であっても、自分の興味のあることがらに結びつけて、意欲的に取り組むことができた。例えば釣りの好きな生徒は魚のみならず、水の問題へと発展させることができた。しかし、何事にも関心の薄い生徒は、追求力が極端に弱く、個人テーマであるため、友人の助けを借りることができず、友人からの働きかけも少ないため指導教官のバックアップをかなり必要とした。

また、1年間の問題追求の中で、自分と追求課題との関わりが薄れ、自分のテーマに関する細かい知識を集めるだけが目標となっていく生徒や、初めの疑問が内容的に狭いために、調べつくしてしまったように感じる生徒もいた。

このような昨年度の成果と課題を考え、今年度は、班活動を中心に取り入れ、自分だけでは問題追求ができない生徒や問題意識の低い生徒も、何らかの役割で班活動に取り組む中で、問題意識が深まる機会を持てるよう心がけた。しかし、班活動においては、どうしても主導的な立場にある生徒に頼る傾向があるため、3学期に小論文を書くことにより、同じ班活動で同じ資料をもとにしても最後には各人が考えたことをまとめる機会を設けた。

今年度は、昨年度身につけた、“自分でテーマを見つける力”“自分でフィールドワークの場所を探す力”“自分なりの表現方法で発表する力”“集めたデータと体験を個人論文としてまとめる力”をさらに充実させることを考えている。その上で、班のメンバーや、クラスでの討論を通して、より広い視野で社会を考え、自分たちなりの国際理解・平和の概念を形成していくことを目的としている。

また、中には、“食生活を通して国際理解・平和を考える”といったように、昨年度のテーマを直接継続している班もある。

2年生では、食事調査から疑問点を見つける→グループごとの意見交流により、問題意識を深める→個人テーマの決定→個人のフィールドワーク→中間発表→個人論文作成→研究集録作成、というように、過程が常に前進した。このため、この流れに乗れた多くの生徒は学年末には、「自分のテーマについては、学年で自分が一番詳しい」「よくこれだけの個人論文ができた」という自信をもつことができた。しかし、一方で流れに乗れない生徒もいた点を考え、今年度は、多角的なアプローチの方法を設定している。ただし、内容が多岐であるため、それらを生徒がどのように自分に引き付けていくのかという点の指導が重要である。

IV. 指導の経過

【4月20日】オリエンテーション

昨年度の総括・今年度のテーマと内容の説明・インターネットの利用方法紹介・各教科や行事との関連の説明など

【4月25日・5月2日】小グループによる話し合い

今までに経験した誤解や考え方の違いなどから起こった争いごとについて話し合う

生徒から、総合人間科の授業のアイデアを募集
井伏鱒二の「黒い雨」を全員に配布して国語の時間に学習

【5月10日】憲法講演会

憲法から国際理解・平和を考える

【5月9日・16日】異文化体験談Ⅰ

海外滞在経験者の話を聞く。(矢木先生のギリシャの日本人学校勤務の話。三小田先生のアメリカ留学の話)

【5月18日】異文化体験談Ⅱ —留学生を囲む会—

生徒を6グループに分け、留学生6人をそれぞれ囲んで話をする。

【5月30日】リトルワールド見学

【6月1日】インターネットのオリエンテーション

コンピュータの使い方の説明

【6月6日】インターネット

メール交換による文通計画開始。各自自己紹介文を英文で書く。

【6月13日・15日・20日・27日・29日・7月4日・6日】
広島フィールドワークの準備(インターネットを含む)

昨年度のフィールドワークの説明・教官による下見のビデオを見せながら行程の説明

各クラス6班(6～7人)の班決め・訪問先の決定

インターネットによる文通を継続。インターネットによる情報収集を継続。

【7月11日・18日】夏休みの活動計画

夏休みに班ごとに名古屋で行うフィールドワークの計画を立てる。班で交渉し、日程を決める。

【夏休み】

班ごとの名古屋でのフィールドワーク。(祖父母やOB教官から戦時中の話を聞いたり、名古屋大学放射能研究所を訪問して見学など)

【9月7日】夏休みの班別フィールドワークの発表

各クラスごとに発表。全員が他班の評価、コメント、アドバイスを書き、各班の参考とする。

【9月21日】広島フィールドワークの準備

フィールドワークの行程の決定。1班ずつ指導教官が面接して、目的、時間、交通手段などを確認。

聞き取り調査の質問事項を考える。

【10月3日】戦争体験者のお話

本校OB教官米山誠先生のお話。(中学3年生だった終戦時に考えたこと)

【10月5日】戦時中の食事の再現

各班ごとに戦時中の食事を祖父母などに聞いたり、『暮らしの手帳』で調べ、材料を持ちより、麦飯とすいとんを調理室にて再現・試食する。

【10月19日・24日】

広島フィールドワークの準備(インターネットを含む)

平和セレモニーにおいて捧げる千羽鶴の作成。(毎日のS.T.の時間にも作成)

聞き取り調査の質問事項のまとめ。インターネットを利用して、海外の生徒からの質問事項も取り入れる。訪問先の最終確認。係の仕事内容の確認。

【10月30日～11月1日】修学旅行

10月30日：広島班別フィールドワーク・フィールドワーク報告会

10月31日：平和公園内にてかたり部さんの話を班ごとに聞いた後、広島平和資料館見学・平和セレモニー

11月1日：大久野島毒ガス資料館前館長のお話・毒ガス資料館見学

【11月2日】広島フィールドワーク活動報告書作成

聞き取り調査や見学場所の内容や感想を所定の用紙に書いて提出。札状書きも行う。

【11月7日・14日】

広島フィールドワーク活動報告書作成および研究集録原稿書き。研究発表準備

【11月21日・28日】

夏休みの活動から広島フィールドワークまでの活動報告会

【12月5日・7日・19日・1月9日・16日・23日】

研究集録作成。夏休みの活動、広島でのフィールドワークを班ごとにまとめる。

【2月1日・6日・13日・15日・20日】

研究集録作成。1学期、2学期の活動を班ごとに分担してまとめる。

【3月6日・13日・15日】

小論文作成。研究集録やインターネットから集めた情報などを資料として今自分たちが何ができ、何をすべきか考える。

V. 生徒の取り組みと変容

1. 全体の取り組みと変容

(1)「自分たちの日常生活の中で経験した、誤解や考え方の違いによる争いや、相互理解の不十分さによる争いについての話し合い」

全体としては、小学校時代のいじめに関することが多かった。過去のことの方が話しやすいようで、たった2時間では、現在の問題点についての話し合いができるころまではいかなかった。「まわりのことを考えずに、のんびり話すからいじめの対象になる」という生徒に対して「それは、その人のキャラクターだから仕方がない」という意見がでたり、「考えてからしゃべればよいのに」という意見に対して「ぼくのように話しながら考える人はどうすればよいのか? 話の内容はどんどん変わっていくから考える

3. 中学3年 体験を通して考える国際理解

時間がある」と真剣に意見を述べる場面も見られた。

この20人の中でも、早くしゃべる内容を考えた者が次々としゃべり、考えるのに時間のかかる生徒は、司会が配慮しないと話すことができなかった。わずかな時間の話し合いの中からも、生徒どうしの会話の中で、ゆっくり考えて他の人と違う話をする事の難しさの一端がうかがわれた。司会があててもなお発言できない生徒や、意見をもっていない生徒もいた。人とのコミュニケーションの難しさをどのように国際理解につなげていけるかを考えるところまでは至らなかったが、いろいろな考え方があり、人それぞれの経験をしてきたという認識をもつきっかけとすることができた。



〈カナダから本校への留学生を囲んで〉

(2) 異文化体験談

第1回は、数学の矢木修先生のアテネ日本人学校滞在中の話と英語の三小田先生のアメリカ留学中の話を聞いた。生徒は普段、数学や英語の授業を受けているが、海外生活の話聞くのは初めてで、「矢木先生がギリシャに住んでいたなんて知って驚いた。いろいろな経験をしているのだなと思った」というように、内容よりも教師の知らない一面を知った驚きを感想に書く生徒もいた。

1年間を通して聞き取り調査を何回も行うが、第1回ということで、聞き取った内容を記録する用紙を渡した。ほとんどの生徒がまじめに記録していたが、慣れないこともあり、書くことにより、話を集中して聞くことができない生徒も多かった。

第2回は、名古屋大学教育学部の留学生3人と本校へのカナダからの留学生3人を囲んで話を聞いた。生徒の1グループは13人と比較的少人数で、教育学部の留学生は日本語をある程度話すことができ、本国で先生をしていた方ばかりだったので、スムーズに会話が成り立った。しかし、第1回と同じように、記録のために下を向いてしまって、会話がおろそか

になる生徒もいた。

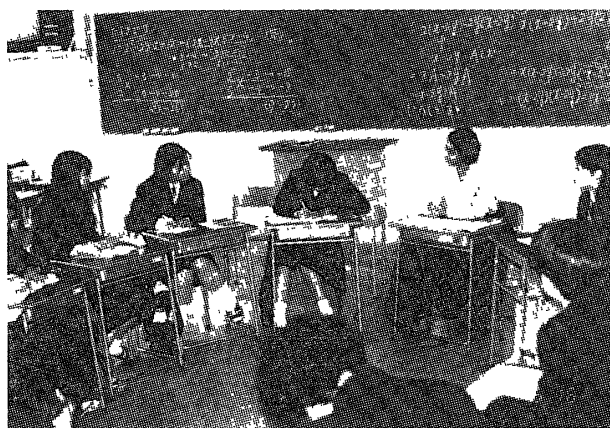
カナダからの留学生はほとんど日本語がわからず、まだ高校生ということで、「Do you like Japan?」と聞くと「Yes.」と答えて終わるなど、会話が續かないこともしばしば見られたが、お互いに身振り、手振りや絵を使って一生懸命伝えようとする姿勢が見られた。質問の答えに対して再び質問をしていく生徒はほとんど見られなかったため、教官で手分けして、アドバイスをを行った。グループでの活動であるため、もともと無口な生徒は一言もしゃべらないというケースも見られたが、全体としては、興味を持って取り組み、「いつもこういう授業だといい」という生徒が多かった。

(3) インターネット

初年度はパソコン学習を一般的にキーボードリテラシーから始め、全員が日本語ワープロのソフト「一太郎」を習得。研究旅行のしおりの冊子と学年の研究報告の冊子の原稿作成をパソコンを使って実施できた。事前の学年担任教師の討議ではコンピュータ教育の対象は「希望者のみか全員か」が話題となった。生徒にとってどれほどの負担になるのか手探りの状態であった。「パソコンの前に座るだけでめまいがする」という生徒も1名いたが学年の生徒全員が「一太郎」を使えるようになった。

インターネット関連ではホームページの作成をおこなった。教育学部大谷研究室の手厚い支援の下、校歌が聞けるホームページは当時日本初の試みであったという。

その他、広島への平和教育の修学旅行の下調べとしての情報検索をインターネットを使って実施した。従来は下見の教師が書物やパンフレットを収集して配布していたがインターネット上での資料集めが中学3年だけでなく、他学年でも普及した。英語で書



〈教育学部留学生を囲んで〉

かれたものが多かったが翻訳は中学3年にとって手の届く課題であった。他に電子メールによるアンケート調査と海外との文通を実施した。

放課後パソコンを使いたい中学3年がコンピュータ室の前で列をつくり、発送したアンケートがアメリカの地域ネットワークのホームページに掲げられているのに驚き、海外からの電子メールを目を輝かせて受け取る生徒の姿が印象的な初年度であった。

第2年次の今年は一般的なキーボードリテラシー、一般的なインターネットではなく、さらに研究課題となっている教育課程開発のために特殊化したインターネットの利用に取り組んだ。グローバル・スクールネットというインターネット上の組織を媒介として本校が「広島への旅」という題の平和教育プロジェクトを主催。アメリカ合衆国の25校、カナダから4校、シンガポール1校、オランダ1校の応募があり31校でのグローバル・レッスンに取り組んでいる。内容は原爆についてのホームページの学習、井伏鱒二「黒い雨」の感想文交換、被爆者への海外の生徒の質問を本校生徒が広島を訪れた時に質問する、アンケートの交換などである。

(4) 夏休みの班別フィールドワーク

広島でのフィールドワークの事前学習となるような場所や質問相手を班ごとに決めた。名古屋大学キャンパス内であるという利点を生かして、アイソトープセンターを見学して、資料をもらってくる班もあった。

保護者会で、祖父母に戦時中の話をしていただくことを依頼し、生徒たちが交渉して、5名の方に協力していただいた。生徒たちにとっては、友だちのおじいちゃん、おばあちゃんということで、身近に話をとらえることができた。

OB教官の酒井為久先生や本校教官の鈴木一悠先生に話を聞くなど、いろいろな年代の方に聞いたため、当時の年令が異なり、覚えている観点の違いも出て、活動報告もそれぞれの特徴が出ていた。

昨年度9割以上の生徒が夏休みに自分で交渉した工場などに見学に行っているため、すべての班がすぐに訪問先を決めることができた。グループ活動であるため、交渉が得意な生徒が中心になったということもあるが、今年は昨年度に比べて、電話での交渉など非常にスムーズに進んだ。

広島でのフィールドワークについてはまだ机上の計画段階だったが、実際に人に会って話を聞く中で、生徒の意識が高まっていった。しかし、どちらかというと、男子の方が取り組みが遅く、この段階では、女子にまかせっきりの班もあった。また、部活動な

どで、日程が合わず、全員揃わない班もあった。この点を解消するには、夏休み以外の日程で時間を補償しなければならない。

(5) OB教官による戦時中の話

ちょうど中学3年生で終戦を迎えたというOB教官の米山誠先生に、「灰色の青春」という題でお話をしていただいた。その中で、中学3年生の時に受け取った同級生からのハガキを生徒に見せながら朗読した。“自分も国のためにがんばるから君もがんばってください。”という内容であったが、当時はこういう内容の手紙しか検閲を通らなかつたということをつけ加えて説明された。このことに対して、「先生が読んでくれた手紙で、友だち同士互いにはげまし合って、戦争のため、日本のためにがんばっていることに、とても感動した」ととらえる生徒と、「思ったことを手紙に書く自由もなかつた」ととらえる生徒や「日本中がマインドコントロールにかかっていたなんておどろいた」と感想に書く生徒がいた。時間の関係で、お話と質問で終わりとなってしまったが、同じ話を聞いて、どうとらえ、どのように考えたかを話し合う機会を持つことができるとさらによかつたと思われる。

(6) 戦時中の食事の再現

各班ごとに材料を考えたすいとんと麦飯を調理して試食した。教官4人では、準備や指導が十分できないことから、保護者に協力を依頼したところ、7名の母親がボランティアを申し出てくれた。自分の親がきている生徒も他の生徒も、違和感なく保護者と接し、気軽にアドバイスを求めている。母親の中には、大学の家政学部出身で調理実習に慣れている方もいて、手早く準備・片付けをすることができた。各班が味見用に出したすいとんを保護者の方が食べていると、生徒が次々と周りにきて自分の班の作品をアピールしていくなどの交流も見られた。

ほとんどの生徒はすいとんも麦飯も初めてだったため、感想には「戦争中にどういうものを食べていたかは少しは知っていましたが、今回、実際に試食することができてよかつたと思いました」という感想も多く見られた。また、「今の日本がどれだけ裕福なのか改めて思い知らされました。嫌いな物を残してしまう自分が恥ずかしいです」という感想もあった。しかし、材料や調味料の分量も自分たちで決めたため、栄養満点のすいとんもあり、「おいしかった」という感想もあった。

中には、自分の家で、さつまいものつるを煮て持ってきて、友人に分けている生徒もいた。また、「朝、

3. 中学3年 体験を通して考える国際理解

祖母にすいとんを作るといったら、材料を聞かれたので、にんじん、大根、じゃがいもだと答えたら、『ぜいたくだねー』と言われてしまいました」「お父さんにいわれたのだけど、昔の人はいものつるだけとか、しょうゆも小麦粉も今ほど良い物ではなかったそうです」というように、家で親や祖父母と会話する機会となった生徒もいた



〈すいとん作り〉

(7) 広島フィールドワーク

①班別フィールドワーク

生徒の選んだテーマ	訪 問 先
A組 1班 外国人被爆者の考え 2班 戦争中の報道 3班 戦争に対する思い 4班 広島の食文化 5班 原爆の被害の大きさ 6班 広島の水産業の実態	韓国人原爆被害者対策委員会、アメリカ人タクシー運転手 中国新聞、市立中央図書館 広島駅と平和公園周辺にてアンケート 旧庁舎資料展示室、舟入りむつみ園、藤井屋 原爆者のつどい、ABC C、郷土資料館 中央市場、アルパーク
B組 1班 戦争中の人々の本心を知る 2班 放射線による影響 3班 広島市の交通、公共事業について 4班 原爆の被害と復興 5班 責任～私たちの責任と政府の責任 6班 ああ広島 その心は・・・	旧海軍兵学校 ABC C、平和資料館、被爆体験者 交通科学館、水道資料館 被爆体験者、郷土資料館、旧庁舎資料館 NHK広島、本川小学校 市役所、郷土資料館

10月30日～11月1日の広島への研究旅行は、班ごとのフィールドワークと、平和公園での平和セレモニー、被爆体験者からの聞き取り調査、平和記念資料館の見学ともりだくさんの内容である。研究、研究で、自由時間が少ないため、次のように書いた生徒もいた。

「私は、最初あまり修学旅行に行きたくありませんでした。それはなぜかというと、まず行き先が広島だということです。普通、地元の中は東京ディズニーランドとかなのに、私たちは、研究ばかりで遊びの時間がありません。だけど、行ってみたら、そんな気持ちはどこかへ行ってしまいました。広島に着いたらいつもとは違う緊張感みたいなものがわいてきて、今までいやだと思っていた研究もいやではなくなりました」というように、初めは、乗り気でない生徒もいたが、フィールドワークでは、広島

駅から宮島まで自力でたどり着かないと泊まれないため、真剣にならざるを得なかったようだ。「私は、今までにこんなに大きな計画を立てたことはありませんでしたからいい勉強になりました」という達成感をもつ生徒もいた。

「私が3日間の修学旅行の中で1番印象に残ったのは、2日目の被爆者の方のお話です」「交通科学館に行った時、私たちの調べたかった事に関する資料がなく、時間も迫ってきて途方にくれていた。その時、館長の方が話しかけてくれて、専門家も呼んできて下さった。その方は質問にも答えて下さった」というように、現地で人から直接聞くことにより、調べたことをより実感できる機会となった。

全体として、計画通りの訪問先をたずねることができ、質問もあらかじめ考えて臨むことができた。係分担がなされていたため、特定の生徒が質問をす

るという面はあったが、係以外の生徒が臨機応変に質問する場面もあり5月の聞き取り調査に比べて積極的であった。まだ、この段階では、広島の世界ワークによって自分がどう変化したかをとらえる生徒は少ないが、中には『広島は怖い街だ』と私は思います。一方では、核兵器によってたくさんの被害を受けた悲しく、暗い街で、もう一方では、戦争に勝つために、毒ガスをつくっていた街だからです。私は、いつも広島に核兵器をおとすなんて、ひどすぎると思っていますが、大久野島に行き、資料を見ることによって、いろいろな事を考えさせられ、考えが少し変わりました」というように、事実を多面的にとらえ、自分なりに考えの変化を感じている生徒もいる。

②被爆体験者からの聞き取り調査、平和記念資料館の見学、平和記念公園でのセレモニー

昨年度は一人の被爆体験者のお話を全体で聞いたが、人数が多いと伝わりにくいため、今年度は、班ごと(6~7人)に分かれて聞いたため、ほとんどのグループが、積極的に質問をする機会を持つことができた。その後で、平和記念資料館の見学を行ったため、展示物を、聞いたばかりの話と結びつけてみることでできた生徒も多かったが、一方で、15分程度で見おわる生徒もいた。平和記念資料館についてももう少し詳しい事前指導を行うと、このような生徒も深く見学することができたかも知れない。

最後に平和セレモニーを行い、旅行委員長、副委員長の司会のもとで、千羽鶴、平和宣言文を捧げた。

③大久野島フィールドワーク

毒ガス資料館の前館長さんのお話を全員できいた後、資料館を見学した。前館長さんは自分自身が毒ガスの製造に関わった方であったため、事実のみでなく、当時の考え方などを聞くことができ、お話の後に、質問が次々と出た。



〈語り部の話を聞く 平和記念公園にて〉

(8) 活動報告会

夏休みの班別フィールドワークから広島でのフィールドワークまでの活動の報告会を行った。2年生の総合人間科において、多様な研究発表を全員が体験してきたため、短時間でさまざまな表現方法を工夫することができた。台詞の分担をしてペープサートで寸劇ふうに参加をしたり、大きな紙芝居、爆弾の模型、コンピュータを用いて作った円グラフ、実物投影機などを利用して発表が行われた。語り部さんの話をもとに、戦後に建てられた家を再現した班は、紙粘土で1枚1枚瓦を作り、着色し、壁にも土壁らしくなるよう細かい砂を吹き付けていた。発表の文章を書くのが苦手な男子も、このような作業は楽しそうに取り組み、教室の窓の枠に“瓦”を干していた。

廊下に座りこんで、画用紙を広げていたかと思うと、あっという間に紙芝居ができあがっているなど、用具を準備するのにも時間のかかった昨年度に比べて、非常に取り組みが早く、いろいろな工夫が見られた。例えば、発表後の質問を受け付ける時に、マイクを持った生徒が、手を挙げた生徒のところへ行って質問を受ける班もあった。実はこのマイクはダミーで音は入らないのだが、雰囲気作りには役立ち、活発な質問がでた。

しかし、発表方法には工夫が見られても、フィールドワークの内容を忠実に再現することが中心となって、そこで感じたり、考えたことが十分表現されない班もあった。また、準備の段階で男子と女子の協力がうまくできない班も1班あった。この班では、涙ながらに話をしてくださった語り部のお話も“50年以上昔の、しかも名古屋から遠い広島での話”というように自分に引き付けて考えることのできない生徒が見られた。感想にも、「戦争中に生まれなくてよかった」と書いている生徒もおり、戦争は“過去”のことであるのとらえているように思われる。このため、広島でのフィールドワークには真面目に取り組んだものの、教室に戻って、たった7人のグループ内の協力ができない班があったことは残念である。発表方法についての意見の違いや分担をめぐる対立があることはしかたないが、粘り強く話し合おうとする力が足りないメンバーを、いかに話し合いの土俵にのせていくかは今後工夫が必要である。

(9) 小論文

1年間の取り組みをまとめた研究集録やインターネットから集めた情報などを資料として、自分なりの考えをもつ。さらに、それらをもとに、討論を行い、今自分たちに何ができ、何をすべきかを考え各

3. 中学3年 体験を通して考える国際理解

自の考えを小論文にまとめる。

2. 抽出生徒の取り組みと変容

昨年度は「生命の源～水と食物～」というテーマのもとで個人研究を1年間通して追求した。その中でA君は、とりかかりは遅かったが、マンガを2冊作るなど、独自のアプローチで問題に迫ることができた。教官が設定した学年全体で取り組む課題には、興味を示さないため、図書館で、説明を行ったりするときには、机の上に自分の好きな歴史上の人物の名前を書き連ねていた。

学校行事などの後に書く感想文はいつも短く、テーマからそれた内容が多く、留学生との会話ではつまらなそうな顔をして座っていただけだったが、感想文には、「イランから見て、日本は経済の国。しかし、経済だけでは、いけないと思った。これからは中近東諸国に目をつけなければいけない。中近東の国々がお互いに理解してこそ、国際理解につながるのではないか」というように内容に沿った感想文を書いていた。

この直後に決めた班の中で班長に選ばれたものの、のんびりと取り組んでいたが、直前になって昨年度まででない訪問先を考えた。しかし、修学旅行の感想には、「広島出身の著名人は毛利元就と頼山陽で…」と自分の興味あることだけを書き、「残念ながら我々はその資料館に行くこともなかった」と書いている。

OB教官の戦争体験の話を書いた感想には、「国のためでなく、自分のために生きるということだ」とだけ書いてあり、このような表現はA君一人であった。こういった考え方を学校生活にもあてはめているため、学校行事であっても、自分が苦手なことには協力しなかったり、授業での共同的な取り組みに興味を示さない面がある。しかし、修学旅行では旅行委員長を引き受け、副委員長の助けを借りながらも最後まで仕事を行い、中学3年間を通して、学校行事に最も深く関わることができた。これには、総合人間科がきっかけとなっているが、その後の感想文に見られるように、自分の考えや感想をストレートに出すことが少ないので、今後の取り組みの中で、興味を広げていってほしい。

VI. 評価について

中学3年では全校的な評価の4つの柱である、知的関心の形成と問題解決能力、創造的表現能力、体験・コミュニケーション能力、総合的思考力を軸として自己評価、相互評価、教師評価の3つの評価を実施する。

自己評価は文章式のもの、項目を①関心・意欲②コミュニケーション能力③表現力④総合的理解の4つから構成する客観式のものを用意している。客観式の自己評価はABCDEの5段階とした。

紙幅の許す限りで引用する。表現力と総合的理解についての部分である。

(3) 学習内容をまとめ表現する能力(自己評価票)

- | | | |
|-------|----------|-----------|
| ①題材選び | 着想の豊かさ | A B C D E |
| ②取材 | 問題のつかみかた | A B C D E |
| ③構想 | 順序・主題 | A B C D E |
| ④表現 | 深さ・的確さ | A B C D E |

(4) 事象についての知識・理解

- | | |
|----------------------|-----------|
| ①必要十分な知識を得ましたか | A B C D E |
| ②学習したことを組織だてて説明できますか | A B C D E |
| ③意見・感想を述べることができましたか | A B C D E |

相互評価は年間計画上の各企画の発表会で実施している。

教師評価はあらゆる場面でタイムリーに助言、激励することを重視し、かつ通知表に、ABCの3段階評価と観点別評価を記入している。観点別の項目は(1)事象への関心(2)創意工夫する能力(3)学習内容をまとめ表現する能力(4)事象についての知識理解の4項目で構成されている。

VII. 今後の課題

中学3年生が他の学年と異なる点は、広島への研究旅行でのフィールドワークがあることと、選択の時間と合わせて週2時間総合人間科があることである。

広島でのフィールドワークは準備にかなりの時間を必要とする。訪問場所を選んでも、土地勘がないだけに、どこにあるのか見当がつかなくなったり、交通手段を決めたり所要時間を考えるのに手間取るからである。このため、事前学習と事後学習を含めて1年の半分以上は、広島中心の取り組みとなる。この取り組みを学年テーマの中にどう位置付けていくかが、苦勞するところである。つまり、広島関係の活動が長くなる中で、はじめのうちは、留学生との話や海外滞在経験者の話などを聞いて、視野が広が

るような興奮を覚えた生徒も、単に、広島→原爆→悲惨→戦争はいけない、というようなパターン化された思考の流れに沿い、それ以上の思考が生まれずに行き詰まってしまうのである。もちろん、このように感じる感性は必要である。しかし、自分が得た知識や体験したことから何を感じ、それをどうとらえたかを自分なりに分析しなければ、他者に対して自分なりの考えを伝えるまでにはならない。例えば、ある一人の人を通して戦争を考える、など違う角度からのアプローチが必要となってくる。

広島での学習を留学生がどのように考えるかと発想をのぼして、再度話を聞いたり、今世界で起こっている戦争へと視野を広げて、なぜ戦争が起こるのか、国際理解とは何なのか、自分たちに何ができるのか、と思考をつなげていくことが必要である。

広島でのフィールドワーク、留学生との会話、インターネット、すいとん作り、祖父母からの聞き取り調査など個々の活動には意欲的で、それぞれの機会に感じることはあっても、それらに関連づけて自分なりの国際理解の概念を形成することは予想以上に難しいことなのである。

しかし、直接見たり、聞いたりしたことは、とても印象に残っていて、最後には書いた小論文に、語り部さんの話を取り上げる生徒が半数近くいた。Kさんは次のように書いている。

「語り部さんのお話をうかがった時、吉野さん(語り部さん)は涙ぐんでいらっしゃいました。それを見てぐさっときました。また、戦争の恐ろしさを痛感しました。本当にあの時は身ぶるいするほど恐くなりました。それに、原爆ドームで展示物を見た時、目に涙がたまるほど、悲しくてくやしくてたまらなくなりました。被害者の写真の皮膚が溶けてしまったのや、文章を読んでいるとなんでこんなことが起こったのだろう。なぜお互い傷つけあったのだろう。一体戦争によって何を手に入れたのだろう、といろいろな感情がわき上がってきました。英語で“まっくろなお弁当”を勉強していたので実際に見るとやはり衝撃的でした。こんな恐ろしい出来事が、たった50年前に起こっていたなんて信じられません。“1945年に戦争があった”と歴史的に考えるだけではだめなんです。実際今までそうだったのですが…。

広島から帰ってから、戦争のことをまとめる時、自分からたくさん書きたいと申しでて、進んで家でまとめていました。すっごくたいへんだったけど、たくさん書きたいことがあったので、とても充実感

にあふれていました。自分から進んで勉強するなんて私にははめずらしいことです。総合人間科をやり始めてから、自分から勉強するようになったと思います」。

2年生の時と違ってグループ活動が中心だったので、人まかせでちっとも自分では考えられない生徒もいたが、逆に、一人ではおもしろいことを調べることができなかつたけれども、班のメンバーに刺激されて動き始めた生徒もいた。例えば、昨年度、自分のテーマをじっくり追求したFさんは、次のように書いている。

「平和とは何なのか。どうすれば平和になるのか。そんなことは1つも私には関係ないことだった。今、私の周りは平和である。それだけでいいのではないかと思っていたからだ。また、班ごとに活動することもいやだった。私は、自分の意志で自由に動きたかった。好きな所へ行き、好きなようにまとめたかった。(中略)私の頭の中には、戦争中は、貧しい食事で、貧しい衣服を着て、幸せなど感じることはないという考えだけがあった。しかし、それは違った。はじめにそれを知ったのは、Kさんのおじいさんに会ったときだった。Kさんのおじいさんは意外にも食物に不自由していなかった。そのころだってたくさん幸せを感じていたようだった。私は戦争についての、私以外の人の意見を聞いた。初めての他の人の話を取り入れることの大切さを知った。その後は、そのようなことのくり返しだった。広島に行った時は、それをひどく痛感した。自分の意見だけで動いていては間違えたことを、班の人と話し合って決めることで、間違えずにすんだ。1人で、話を聞いていては、せまかった聞き取りが、いろんな人の聞き取り方を知り、より視野を広げることができた。1人でまとめていては、間違った解釈のまままとめて失敗したものが、班の人の違った解釈の仕方を知り、最善のものがつくれた。これらのことは今まで私になかったことだった。(中略)総合人間科で班活動することにより、人の意見を聞くことの大切さをした。しかし、すべての人の意見にまかせるのではなく、自分の意見もきちんとまとめていかなくてはいけない。私を含む多くの人は、どちらかに片寄っていると思う」。

Fさんは、今年もまた、この一年で大切な感覚を身につけたようである。そして、この感覚こそが、“国際理解・平和”への一歩となることと信じている。